

はしがき

「得点おまかせシリーズ」の第2弾は、みんなが悩んでいる正誤問題対策です。実際の入試問題を分解して誤文だけをたっぷり集め、正誤問題のプロになってもらおうというもくろみです。センターから早慶まで、またオリジナル問題も用意されています。どこが間違っているかはそれぞれ右ページに指摘してありますが、カンに頼らず、誤りをきちんと発見してから確かめてください。

●●●本書の使い方●●●

次の点に注意してください。

正誤問題にはいつも悩まされる

正誤問題に出会うたびに、カンに頼って、「なんとなくアヤシイ」「なんとなく正しそう」ではもう限界でしょう。だいたい、大人が堂々とウソをつき、それを印刷して青少年を試そうなどという姿勢そのものが許せない。まったくどうしてくれるんだ！

しかし、正誤問題ほど、作る側からすると便利なものはない。理解力も暗記力も、何でも判定できるし、何といても採点が簡単。そこで、センター試験でも花形の出題形式として定着したままです。これは何とかしなければいけない。逆にいうと、正誤問題に強くなるということは、総合力が確実にアップするということを信じてください。

では、具体的にはどのような点に注意していけばよいのでしょうか。まず基本中の基本は、

明確な間違いを見つける

当たり前ですが、はっきりした間違いを探してください。正しいものを探そうとしてはいけません。絶対正しいと判断できる文章なんて、よほど単純なものです。しかし、正誤問題に出てくる正しい文章なんて、ほとんどが疑わしく見えるものばかりです。誤文と入り混じっているわけですから、実際には自分の知識が疑わしくなってきた、何でもない正しい文章でも、なにやら怪しげに見える。そこで、よほど確信を持って「○」というもの以外は「△」にしておいて、はっきりした「×」を探す以外にない。

正しい文章なんて見つからない

そうです。正しいものを見つけるのは至難の技です。そこで、正誤問題に強く

なるためには、多くの「はっきりした誤文」を経験しておくこと以外にありません。そこで、ここでは誤文のみを集めてあるわけです。時々、「チャレンジ」コーナーで普通の正誤の入り混じった問題も掲げてありますが、基本は、誤文とわかっている文章から誤りの箇所を発見する訓練です。

誤文の形が見えてくる

これは結果論ですが、誤文にはいくつかの基本的なパターンがあります。分類自体に意味はないのですが、代表的なパターンは次のようなものでしょう。

誤文の基本パターン

1. 1語訂正型

文章中の1語(a)を、別の語(b)に替えれば正しい文章となるもの。人名・地名・年次(時期)・法律名・条約名など、要するに1語を訂正すればよいものの。

2. 2語入れ替え型

文章中の語(a)と(b)を入れ替えれば正しい文章になるもの。片方だけ(1語)誤りとわかればそれで誤文と判定できるから、上記1と考えても判定はつくが、実際には対比される2語が入れ替えてある場合が多いので、つい迷ってしまう。典型的な対になる2語については、日頃から注意しておくことが必要。

3. A⇔B・B⇔A型

事実経過ではAの後にBが起こっているのに、B⇔Aの順序になっているもの。

4. 説明失敗型

一番ヤッカイなもの。1～3では誤文と判定できない場合にはここをチェックしてみる。「～はその後も続いた」とあるが、明確に「～はその後断絶した」といったもの。あるいは、「効果を発揮した」とあるが正しくは「効果はなかった」といった逆の評価を下しているものなど。

5. 2文接合型

関係するテーマについて、前半はAについての文、後半はBについての文となっているもの。あまり多くはないが、1～4のパターンでは判定しにくいいため迷ってしまうことがあるので注意。

6. 融合型

慶應義塾大などに典型的なもので、どこを訂正しても正しい文にならないような、誤りだらけの1～5の複合型。複雑骨折といったところで、このようなタイプの誤文を出題する大学を受ける場合は、その心構えを知っていれば、単純な誤りが1箇所見つけられれば、あとは簡単。

経験がすべて

以上はあくまでも参考です。ある意味で結果論です。分類などはどのようにでもできるでしょうから、あくまでも初めのうち、初心者用の気休めだと思ってください。実力がつけば無用になります。

そうです。理屈ではありません。そんなことで正誤問題に強くなるはずがない。知識そのものを正確にしつつ、実際に自分で誤りを見つける以外に解決方法はないのです。

正誤問題が得点源に

ということで、本練習帳で、問題集数冊文を超える誤文と取り組めば、確実に、誰もがイヤガル正誤問題が得点源になっていきます。確信を持って、最後まで取り組んでください。

1 考古学分野

1-1 死者を埋葬するときに、縄文時代は伸展葬が多く行われ、弥生時代には屈葬が多くなった。
(関西学院大)

1-2 縄文土器は、薄手で赤褐色のものが多く、その名称は土器が発見された地名にちなんでつけられた。
(センター試験)

1-3 弥生土器は厚手で黒褐色のものが多く、その名称は土器の文様からつけられた。
(センター試験)

1-4 弥生時代になると、青銅器や鉄器が普及し、石器や木器は使われなくなった。
(センター試験)

1-5 弥生時代の後期になると、青銅製の農工具が普及し、それをういた水田の開発が進んだ。
(センター試験)

1-6 5世紀には大王の名を記した三角縁神獣鏡が、近畿地方を中心に出土している。
(センター試験)

1-7 古墳は、小さな円墳が集中している群集墳が発生した時代を経て、大型の巨大古墳へと発展していった。
(法政大)

1-8 古墳時代の埋葬施設は、はじめ横穴式石室であったが、後期には竪穴式石室が多くなった。
(関西学院大・東京経済大)

1-9 5世紀には巨大な前方後円墳が現れるが、奈良県の高松塚古墳もその一つである。
(センター試験)

アドバイス

迷ったらすぐに復習すること。「なんとなくアヤシイではいけません。はっきり、ここがこう違うと指摘できるようにすること。その上で、右ページの解説を読んでください。

解答・解説

1-1 「伸展葬」と「屈葬」の順序が逆。

典型的な A ⇒ B が B ⇒ A になっているものです。縄文時代によく見られる特殊な葬法が屈葬だということは十分知っているでしょう。

1-2 「縄文土器」が誤り。

薄手で赤褐色、最初に発見された遺跡の地名が弥生町ですから、縄文土器ではなく弥生土器です。

1-3 「弥生土器」が誤り。

1-2 のちょうど逆。厚手で黒褐色は縄文土器です。その文様から「縄文」の名前がついている。

1-4 「石器や木器は使われなくなった」が誤り。

石器や木器も使っています。簡単にすべてが青銅器や鉄器に替わるわけがありません。

1-5 「青銅製」が誤り。

もともと青銅器は日本では宝器や祭祀のためのものとして発達しました。実用の道具はもちろん鉄器です。これも基本中の基本。

1-6 「5世紀」が誤り。

三角縁神獸鏡は3世紀末～4世紀。卑弥呼が贈られた銅鏡ではないかという説があることは知っているでしょう。

1-7 「群集墳が発生した時代を経て、大型の巨大古墳へ」という順序が逆。

5世紀の巨大古墳から6世紀になると小さな円墳、そして群集墳が目立つようになります。これも5世紀と6世紀が逆になっているということです。

1-8 「横穴式石室」から「竪穴式石室」が誤り。

これもまた A ⇒ B が B ⇒ A です。前期・中期が竪穴式石室で6世紀以降になると横穴式石室が一般化する。これも基本中の基本です。

1-9 高松塚古墳は「5世紀」ではない。

高松塚古墳は7世紀以降の終末期の古墳です。必ず覚えておかなければいけません。単純には高松塚古墳は、その壁画が白鳳文化として注目されているということ覚えておけばOKです。